

生誕 150 年 書簡にみる
竹内栖鳳と高島屋展

竹内栖鳳の初公開の書簡23通を含む書簡34通を一挙に公開

- 会 期 : 2014年10月31日(金)～12月25日(木)
前期=10月31日(金)～11月25日(火)
後期=11月27日(木)～12月25日(木)
- 会 場 : 高島屋史料館(大阪市浪速区 高島屋東別館3階)
- 開場時間 : 午前10時～午後6時
※前後期ともに最終日は午後5時閉場(入場は閉場30分前まで)
- 休館日 : 水・日曜日
- 入場料 : 無料
- 特別協力・監修 : 廣田孝(京都女子大学教授) 高井多佳子(京都女子大学講師)

高島屋では2014年10月31日(金)～12月25日(木)まで、高島屋東別館(大阪市浪速区)の高島屋史料館にて、生誕150年「書簡にみる 竹内栖鳳と高島屋展」を開催いたします。

近代日本画の巨匠竹内栖鳳は、若い頃、染織品の下絵を制作する画工の一人として、高島屋の画室に勤務していました。近年、栖鳳の画業において下絵画工時代の仕事が注目されつつあります。

本展では、竹内栖鳳作品と資料など、前期・後期合わせて64点と、高島屋とゆかりのある栖鳳の師・幸野棹嶺の作品をはじめ、栖鳳の弟子・小野竹喬、池田遙邨、榊原紫峰などの作品13点を展示いたします。なかでも、初公開の23通を含む34通の書簡は、栖鳳と高島屋の密接かつ親密な交流を伝えるものであり、栖鳳の仕事ぶりや創作意欲、本音のやりとりも垣間見ることが出来る貴重な資料となっております。栖鳳が関わった高島屋の仕事、国内外博覧会で高い評価を受けた美術染織品製作の舞台裏など、栖鳳と高島屋との交流をご紹介します。

「アレタ立に」1909(明治42)年 →
(前期展示)



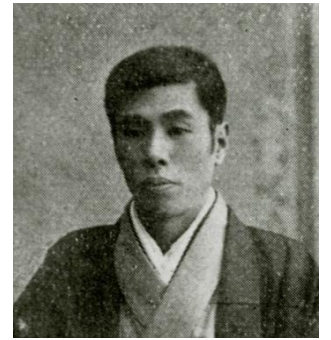
竹内栖鳳と高島屋

近代日本画の巨匠竹内栖鳳は、20代の頃、高島屋の画室に勤務していました。その頃、高島屋当主四代飯田新七は、1889（明治22）年に単独で欧米視察を行い早くから海外に眼を向けていました。刺繍額やピロート友禅壁掛けなど海外輸出向け染織品の製作を精力的に行う一方、世界各国で開催される万国博覧会などにも参加するようになります。高島屋が竹内栖鳳ら京都画壇の画家たちに下絵を依頼し、美術染織品に仕立てて出品した作品は、美術的、工芸的価値が評価され、数々の賞を受賞しました。



高島屋四代飯田新七（1859-1944）

1895（明治28）年 撮影



竹内栖鳳（1864-1942）

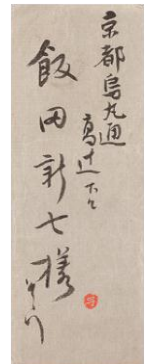
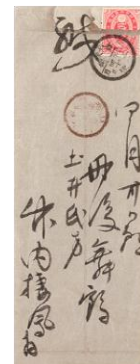
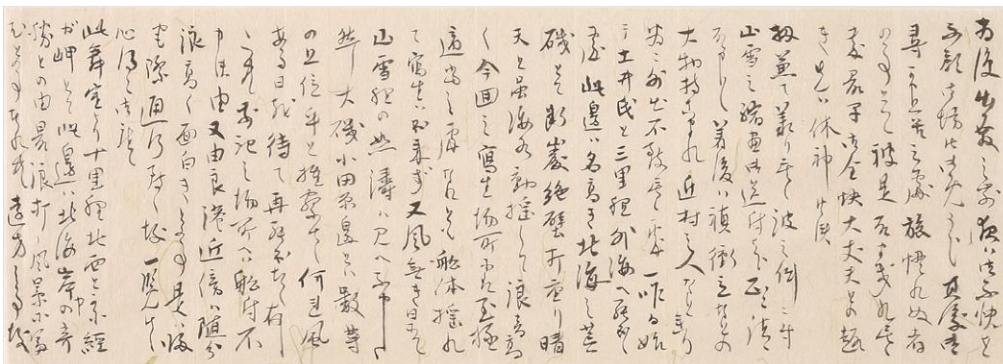
30歳の頃

書簡について

竹内栖鳳の初公開23通を含む34通の書簡を紹介いたします。栖鳳の書簡がまとまって残る例はめずらしく、栖鳳と高島屋の密接かつ親密な交流を伝えています。高島屋における栖鳳の仕事ぶりや、国内外の博覧会で高い評価を受けた美術染織品製作の舞台裏、個人的な交流が垣間見える貴重な資料です。

「この辺は名高き北海の荒磯とて…今回の写生場所には至極適當の処…」

竹内栖鳳書簡 飯田新七宛 1893（明治26）年 4月30日



1893（明治26）年春、栖鳳が丹波地方の写生旅行から四代新七に宛てた手紙。「高い波を写生するために、三里（約12km）ほど外海へ出て名高い北海の荒磯が打ち寄せる場所へ行ったが、船体が揺れるので写生ができない、とはいえ、風の無い日では怒涛が見られず、風のある日を待って再び海へ出たい」と書く。四代新七の日記には、この書簡に先立つ同年4月23日、栖鳳はじめ神坂雪佳ら5名を集め「浪屏風の件につき相談会」を行ったとある。この「浪屏風」は翌年の12月30日に完成したという。

なお、この屏風は1896（明治29）年3月、ロシア皇帝ニコライ二世の戴冠式への日本の贈呈品として宮内省に買い上げられた「浪屏風」ではないかとみられる（現在は所在不明）。

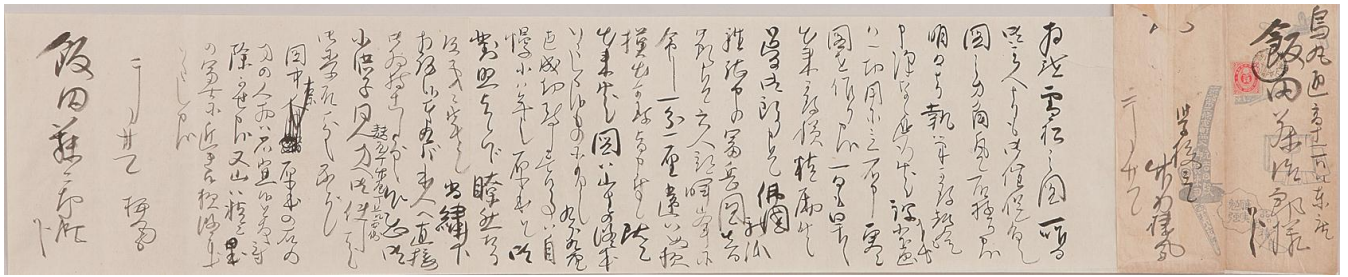


「浪屏風」
「高島屋貿易部アルバム」
（美術染織作品の記録写真集）より



「山は精々日本の富士に近き候よう修成いたし申し候」

竹内栖鳳書簡 飯田藤二郎宛 1899 (明治 32) 年 2月 21日



1899 (明治 32) 年、飯田藤二郎 (四代飯田新七弟) 宛の書簡。「雪松之図」は、高島屋が 1900 (明治 33) 年にパリ万国博覧会に出品した刺繍の大壁掛「底銀地雪松図」の下絵とみられる。ご主人 (= 四代飯田新七) からも催促があった「雪松之図」の方角 (構図) も決まったので一日も早く完成するよう精励する、と書かれている。また、先日預かったフランスの雑誌に掲載されていた「富岳図」は、弟子に模写させ、栖鳳が修成して「九分九厘」まで成功したとある。末尾には「原本の右の人物はよろしくないと思うので除いた」、「山は日本の富士に近づくように修成した」とあり、栖鳳が西洋画の構図を改め、かつ日本風にアレンジして新しい作品を創り出していることがわかる。



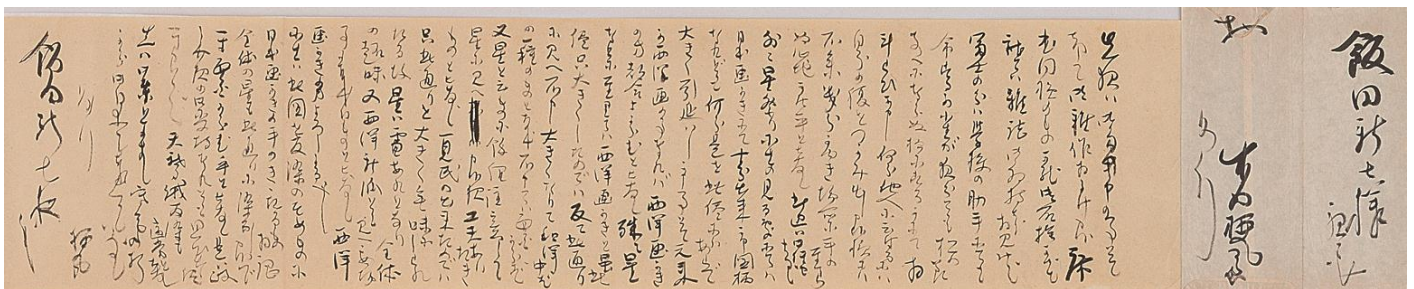
「底銀地雪松之図」刺繍大壁掛け 「貿易部アルバム」より



パリ万国博覧会刺繍会場写真 「千九百年巴里万国博覧会出品聯合協会報告」より

「和洋なかば一種のもの」と相成り申さずては面白からず…」

竹内栖鳳書簡 飯田新七宛 1899 (明治 32) 年 月日未詳



栖鳳が、渡欧前すでに日本画と西洋画の表現を融合させることを考えている様子が知られる書簡。「星祭り」という西洋画をもとに大型の作品を制作するにあたり、「日本画描きで十分出来る図案だが、もとは西洋画なので西洋画描きの方が良いだろう」といい、作品が日本画と西洋画を融合した独特の作品とならなくては面白くない、と述べている。また、「日本画描きに描かせ友禅の染物にしたら面白いだろう、ビロード友禅も適していると思う」と、湧き上がるアイデアを四代新七へ書き送っている。栖鳳が、美術染織品製作において総監督のような役割を果たしていることがわかる。

竹内栖鳳の作品など



ビロード友禅壁掛け「波に千鳥」大下絵
1900（明治33）年頃

日本が国の威信をかけて参加した1900年パリ万博。明治天皇からご下命を受けた高島屋四代飯田新七は巨大なビロード友禅壁掛けを出品することとして制作に取り掛かった。作品自体はフランスの女優サラ・ベルナル（1844-1923）が購入。彼女の死後、現在も所在不明である。

（前期展示）



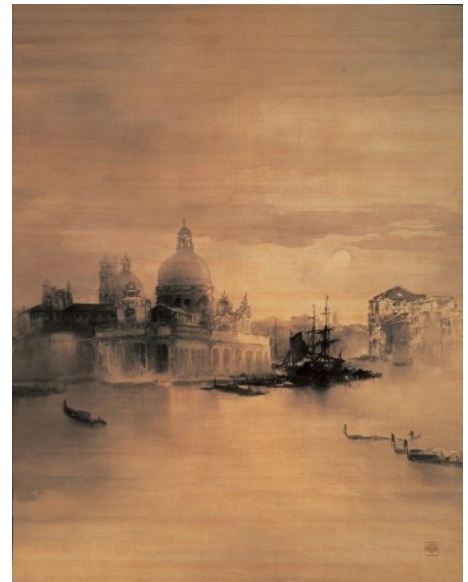
「長襦袢《龍》」年代未詳
制作年代は不詳だが、「棲鳳酔画」の落款と印章を持つ。

（10月31日～11月15日展示）



「国瑞」1937（昭和12）年
栖鳳はこの年、横山大観とともに第一回文化勲章を受章した。その受賞記念にこの作品を描いたと言われている。

（後期展示）



「ベニス」1904（明治37）年
1910年の日英博覧会に高島屋が出品したビロード友禅壁掛け「世界三景雪月花」（三部作）の大下絵。「ベニスの月」のビロード友禅作品は現存しており、大英博物館の所蔵になっている。（後期展示）

ギャラリートークのご案内

京都女子大学講師 高井多佳子氏によるギャラリートークを開催いたします。

●11月15日（土）、12月13日（土）各日午後2時より約30分